

## 編集後記

『明海日本語』は、明海大学日本語学科の創設後まもなく機関誌として発行され、20年近い歴史を持つ。スタッフの研究の公表の機会を作り、新設の大学の活動状況を外部に知らせる機能があった。これまでも優秀な論文が本誌で発表されてきた。

『明海日本語』は、10, 11合併号（2006）以来、研究を活発化するため、大学院生の論文の掲載に門戸を開いた。また13号（2008）以来、「研究ノート」を設けて、教員・院生・学生の研究のエッセンスを要約して伝えられるように配慮した。

提出された論文と研究ノートは、日本語学科専任教員が審査し、場合によっては書き直しを命じ、あるいは掲載を認めないこともある。教員の投稿論文も、相互に審査し、採否については院生と同様の措置をとった。つまり本誌掲載の論文は、レフリー付きの、学術雑誌並みの価値を持つ。

16号での論考の配列は、論文テーマ相互の関連によった。今回は現代日本語の分析以外に、言語景観に関する報告が目立った。ここ数年の博士論文、修士論文の要約が集中したためである。音声に関する研究は、研究ノートの形の短編だった。（他大学や研究所の）現職教員の論考が集まったのも、ありがたいことである。

また、学生の卒業研究の題名と要旨を掲載する。多様なテーマで取り組んだ成果である。明海大学日本語学会の主な構成員である学部学生の記念、思い出になることを期待したい。

来年度以降も年1回刊行のペースを厳守し、卒業生には卒業式に、在校生には新年度のオリエンテーションの際に、配布できるようにしたい。

本号の編集には、大学院博士後期課程の高丸圭一・李明心が活躍した。また、本学教員の荻原稚佳子が卒業研究要旨の整理にあたった。

2011年1月

井上史雄